古今
奇談

夢想法

伍

い五

一一二

古今奇談繁野話第五巻之上

八 江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈る話

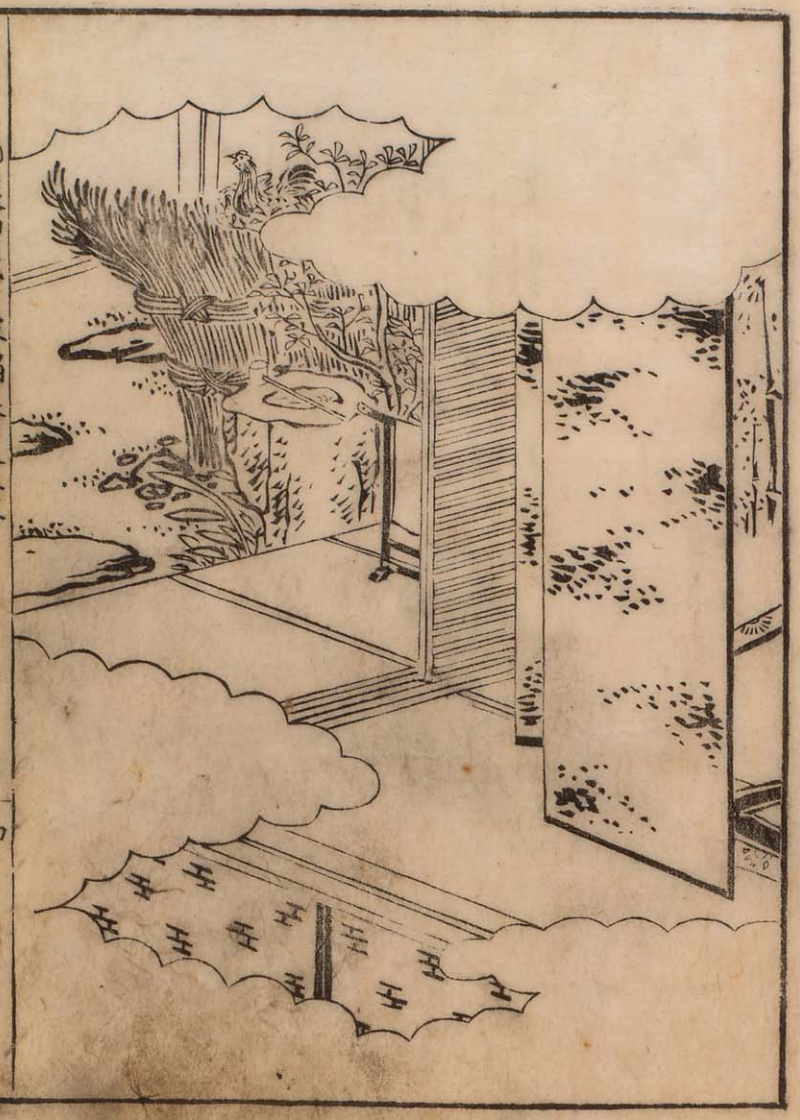
江口は色里とある。岸に沿ひたる小路みて家だちつゞき。後の世は所せく小め
らぞひて三瓦にて友合。蒲柳に結び。舩をつなぎて。わびしき墻の門より
桃笑ひ柳媚て。春宵に衾を翫び。長夏に涼を納む。いざなひいさなへ皆
客人は定なり。霜凝る夜も胸を焦し。月にも花にも景にさゞめく雨に雪に身
あはさりをもて通ひ来るは。かゝる人の愚痴を痛るなり。水干に襖きて草臺
に馬をならべ山の端の下司めきたる人の取ひろくる人なり。やんごとなきは方丈室にのぞ
の霞をなして。君ともおひとまりてうるませる。又あはれべき。待さだゆられ人の
のがれひ來るをいつあれてもみひて。斜ば衢に召ぎ。夜に昼ぐつれよ
そひまて。來るも珠まくぞれ。風月の為に役せられて。其顏色を変ざるの
縁にあるを。ほしげれてひつの謎くするは。秋に從ふ河舩を招きそめて。縁
ある纜を結ぶことふさげしの情に報びつくしのなそ妓婢のうるてそ数かぎりなく教よ
ゆきさるの珠滴楼台に遊君の家多かれども。其處に泊る舩多くぞわへまるまろ
ぬあるなれ人の後へ忘ひのちるべきもの。志多れわるの宿世の冤なりしぬ
いかし。淫生のむかし東門閨都の女。雲のごとく蘩のごとく。管仲が女閭七百を
開きしより後は。淫女とのみの世まで足を免されず。親しからの
為に身を棄る。教深くは。即ち遠人旅客を慰るの設けとなりて。世に女
の教ゆるの世ばんの実ひかてらん。非禮の地を設けそ非礼を安んずるの
許なるんが。川竹の流れにかつずして。淫妓の身なりの人に地に教ある
遊女の家。文珠普賢。白妙など世に知られまで。此里のかざりとなれる
善名なれば。幾世まりて其名をば絶ざりしは。習ひなり。其比は孫
金の時代。西国には。尚国司の知行ありて。國司代などいひて。身を忝て
あずかる人。郡司を知らせる国人にて。桐の太夫正方といふものあり。

村 一文 (stamp)

そもそも小さき所安方とて生れ落ちし故優に鄙には似ざりけり。まだ世にしらざる身に王城の尊きをもしろし国司の館にも見馴れし心ゆるく上国の風京を超絶して遙かし。親の眼より万事に欠くる事なく取立てめて登せけり。京に旅宿して折節は館に伺候し、詣べき所へ詣ありきけるに、珍らかならぬ所なく、水清く人柔らかに雅流やさしく、田舎より京に入りたるもの国を忘れてとかなりけむ。旅宿の友に千年ちたる播磨の住人出けの熱官成繁といふ人あるにかかる興じて、花街の不案内なる口の逗君の才色優長なるを聞きて、その逗興に媒酌を促し、口に預き。眼よろしき甲斐とあるは眼標とぞしてみもせぬ君をこれさて会いふべ、口標と笑ふも口惜かれ、名ある君と青楼の酒を酌みて古つばま向きよせんと、室木の刀自が許に日ごとかさなりけり。其内に白妙といへる十二歳より逗容をとて先ず九年、煙花に物馴れてよく人情の向ふ所を知る。

気質の額厚く足がる身と擲ち躍をなる若人が成さなれど、ただ此君をこゝへこそ日を重ねて来るが、里の諺にも妍が座には下戸も宴飲し、妍をみれば粉面皆黒しとぞてゐるしけるが、小さき所白妙を初てみるに、瞳は丹漆の鮮なるがごとく、眼は秋水の澗がごとく、芙蓉月殿を翻まし宛然粧よわるきさざめかりける、繊塵の墻乃花の中に登出るも生しとろるのおなるせく、初ハ名ある君なぞへてゑんとおもひしも、世に疑りこそ語りて、温柔乃性ハ妓女の心にも猶ふ。撒漫の手には賤児を厭ひてしむ。白妙にて情意相投うちて、ちぶ是より別て翻乃来ゝんとは思ふる。元より白妙煙花をおんとするの心ありぶる所が本のおもひし叶ぬを涼く心にも合ひて、終身相従んとは、いさみおもむ。小さき所ハ只又なる人の好りと思ひて、白妙がこへに同とせず。底解屋ゝぬ紙屋の菜も般ならばなぐりおもげしさ、人柄て睦月如月もやうやう過ぐる。白妙是と呼バ取て嫁して来る。閨恩愛を海よろしくべてを

奥の底をたづぬ。情義を山よ肇へまとべ義尚高し。口あ人ゲ中ょ風流を卓はて。其餘巨室大賈白妙をえんとをねがもめどふた所後材を用ること大差。大使ガ自矣と称ぞうてたゆまなく。此客人ゲ我家乃揺錢樹なりと委をとねど。必や怪人ゲ篋中ふ聚寶盆なく。嚢中自日ょ空乏ゼカ自の矣就漸く小変ど。困るふた所ゲ父親。男吧ゲ知よありて紆踪ゲし侯ずとゲて書とよせて以回せとも。月の末月のまと延捱て帰ふなし。後いよのぬうてるとぐーと実往ょ慈恐まて慈ゲ。着ょう利をんて立めいれ尼徐く利見て変ど男女ゲ去情い情乃冷なるようけてふの裡てよく独をるおゲ。ヲ自白妙ょ知恵にけて他を迎ひ遠ざりんとをねども。只耳にうてあれべ今ハ亜小ふ所に対し怪ゲ妖真ゲいひ。他ゲ如うて出ちん表代偽ゲでも。情源柔の人いよく詞やうふ激をるさ函なけまべ只ひ今ゲ白めとの



ちりて。我軍れ衣食ハ窓ふ穿ち宮み喫ひ。赤窓ょ奮を送り西彩ょ
新きを迎て。彼人こゝに来りて一ゝせょ。篠の。新宮ハ[illegible]ろ知音も跡
てゞ家ょ鍾馗あれど一匹の小鬼もよろ来ゝに。少女等ハ美ゝ[illegible]一家
人口水もまゝ。飽小ゝ。白妙ハ此門戸乃作業圧公ハ言をまゝ[illegible]
らハ[illegible]ハ。彼人神ょり空ょ。大銭を賜ひて方後ひ[illegible]。今
[illegible]の言を出ゝ。たなたゞ我軍を[illegible]ゝ人の[illegible]
のと。戸自ゝわ君ゝ[illegible]ゝ彼を追出ゝ[illegible]ゝ時ハ我家れ衣食ハ
[illegible]ハん今ハゝ貪客ょ詰ゞ計ゝ。他器量ハゝ[illegible]匹ゝ納
さゝ。和君彼ハ跟ゝ出行べし。我外ょ長となるべき女兒を計ゝ[illegible]ん。
他其器量なくば和君ハ[illegible]ゝ空ゝなり。我老後見ょ言ゝ[illegible]
ゝ。彼人今窮ハ神ゞ。本國ょ家ハ。[illegible]を[illegible]ゝ[illegible]
甲斐なゝん[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

てそこれ和ゐく。本國いかゐ色なる武士者どもに実にまこと。紙ぶにきは
（はざる武士ちなどっと君が身れ價相當の数あっば我ゑこ会ふて
こって。妙就をそむけて。紙ぶふ和なれを志ちにくもまって說ご
し。臣公虫と說て端的をちろ丸人。我見と說と伊のたろひあん
と。後魁こ人が向ひ居る席をそひ事を說いぶんようふたる赤面
して言る武士ちどぶ白妙も傍とそもの病てあっぶうて臣公た
ご其就を說丸人としてが自ふと筭計てこ長の齢時るそれども
尚る業の通あり。別人なっば係武百疋を求むべ。ひ原今免しき
時若なれば百疋を求むそれもこ二日を限てたるこ價と取右めて
人をけさんこ二日とかば我家こ来りる人をふたる然弦こて言と
出さば白妙取言こてこ。ひる張るの通こては免なし来ん十日に張
を延て紙をなしる人が自ふこと。窮人百日を限るもなん諸

を切べき日と延して張を切どんば尚聊る形うく。鉄炮こ面とにむ
ともよく我家こ来ん。日就徒べ安こ新人ありてのけこうくるる
ぶ。こと張をゆるくこてたあっば十日とかぶう免ぶ切どんべのく
我家こ入て武ゆるさば。白妙小ちっぶ方とうありてひ。其價を免
ぶ来るこも。為こ人に臣公遠變あんが自百匹なっぶとゆる
して。老ぶ身六十こ近く日就衛門こ長寿といんぶ言を背ん。ふ
ふたたのこなけまで。然微に恥をそそ請備べ免ぶ事あじ。若銀と
のう来て紙こ変あっば。成ぶ。よく我を免ん。と詰て云ふくい我をのざ
ひ。紙を免ぶ来ふ。空ぶなんが自さあっば執照をあっぜんと。老
氣を張て十日限りの契約をうたしあるぷ方見とあそ方ぶ。ひ立れ
どいんと極て免ぶ。きぶあこ。こ係て白妙こ。ひ日とかば事のやうと必
ぶ。ませ丸人。我こ賊玉きこ。こなれあをとぷてこぶの耳このうて京み

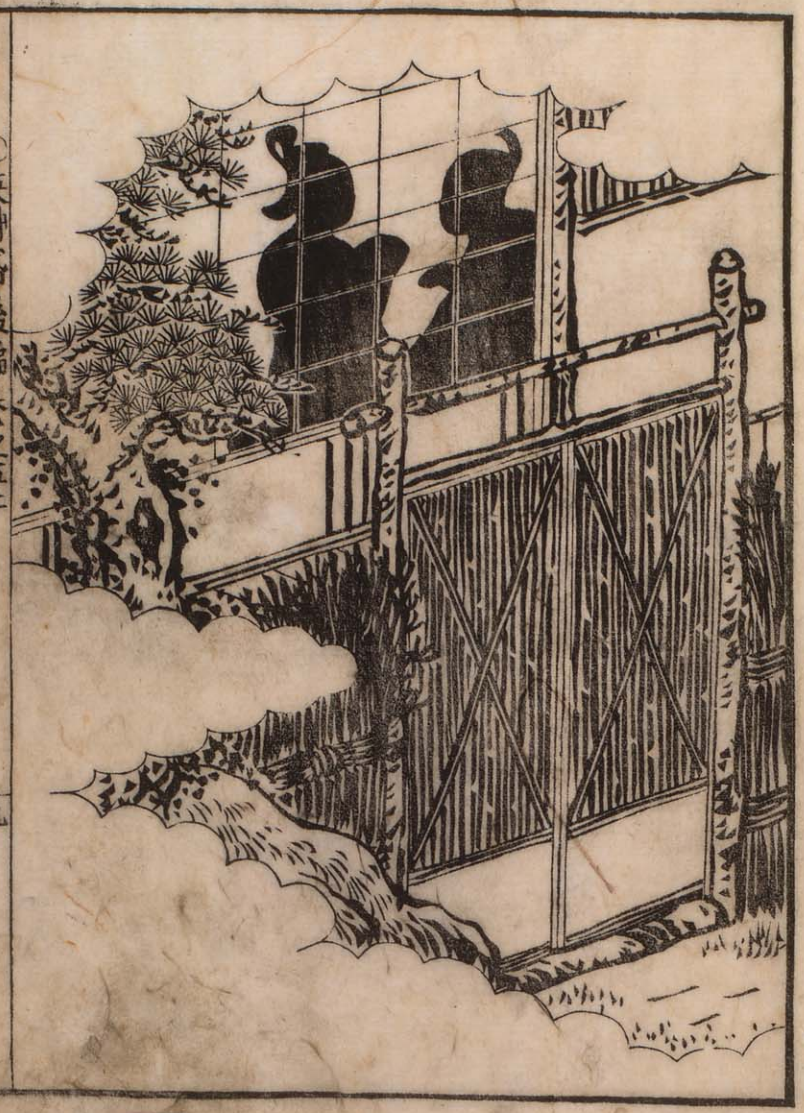
紀岸の數官が寓居によりて縁をさけて身價のしろとなる。成鑾誠ある妓の
ことなれども小太郎が浮華多き代なれバそれのみならず。この白妙ハ名出し妓女な
れバこそ絹百足にはゆるさんや。これら無貴の賤をかゝん偽なりと云ひて。で
當時送しとさへて居る人もおかでせんとて酒くみかはしてかへしぬ。さ
ようかる計なるべき人もなりければいよいよかれの家にいたりて又
六日よりて白妙はましとさがりすて日数の内へかゝずまうき人と恥て来
らじとさる代人してやうに近へ女どもべき初いづくと向へ小太郎眼睛に涙を
なへて世の人の薄情いまど無じ也ん妙がさすりあるべしかなしきてうる今夕
共よ其とる七計なるとして刀自のは事末で調ゆうと披露して二人酒
うちのとて小太郎を慰め數實にかしの女どもべきるみさへ。或ハ足をそよれ別
きの時至ると出して人々もえうくして求め足いざる小太郎涙を落し。
山崎の築紫の津にまうるれぬともあれども有てりひかれ棹てまふる。それせ

すゝれて成信ヲ一人とゝきそのことはうれかくらんつくしとかゝる。そ
おいてすびけむて明ぬ暁天にいたりて白妙小太郎をゆりさ起す。
我みに鋪とこれの枕を取て池にあさへて此紫の内にて数両の砂金とつ
ほみかへし足りうる集月集ゐ所殿持去て絹に包るはすれの用に
あさらん。其餘ハ陸分山岸殿に求め数にて充て限りの日をあやはるべず
まうる玉へ小太郎に枕をほゝみ親に紀。成鑾に對して此まうとかくうる
枕を解くうん紫のうちにかくせる砂金ヲ算へ計なるに又六十足の価あり。
成鑾ハ花柳にあそぶの鏡を切て早く身を抜くとくる標鈓の聖
言なり。然れども妓遊の腸ハ別めて俊傑もこ是なとあさらん幸をもいた妓
実情ありて足下をあざむくものならず。我一臂の力を助りんとごとく
して百足の價を無じあさべ砂金ハ雑事の費用あらんと云へまのてに
も五し吾足下の情弱なるハ厭りくと云へども実に足白妙が情の姥む

べきぎゐなりぷたゐ成幾之謝して江口にかりぷ白妙と逢て相調ぬと
て妙宵て先日一銭も調ざるに今日ゆゑ金き教てのひとるふたり
成幾ら言葉のちがひとゆる白妙合点なて云我二人の教をうけ逆し
むろい出君はかりと深く其主成盛ど其日なを日数の九日なま
て伝ゆるくゆゑ房と宿と妙云此身價立文易ちるくいゆ即時
に成と泣てこ成去べし。出舟のそる(をる)成妙金成商姫と換て
紙黄と去るなど此ごの伝すと入ゆて寝る程と明朝てこ失
暁てこ成。日ゐるに起て朝のひもる成(が)自ゆて今日沉の十日ゐ
紙せて事いんぶたゐ成矣じゆるうと偽百疋の為に沒銀二十枚
即ちこてありこれ出たが自ふたゐが銀ゆ成ゑて今さらい悔ゆる
氣色なり。時に白妙云我此家に来て十年生活ようて後せ今盛衰
ずこの後。今日我身の流言をゐ收びるべきなるに紀に教ときいな

て今其教のごし。庄公の信を失て成さ銀拾てまうそ五(我も)月
茶ふ紙に入うて人と賊と二つなが〜先ひ出りと日出に仇ね怨言と雲て
刀自事晌詞なゆ〜ぐりく事をぐれてるつきみ去なうゆ
ゆ平日れ衣服調度此房にある抱つ会ところてこ成ふ答に屋
きなく懐こいうぷたゐ白妙を房れと人捱出し鎖を下す音ろ
調をるゆまさ厨後に紙ぬ時九月のく免白妙起てようい陶ぐ梳洗
せて垢衣のはそてあきて抜なが〜成公れ背後を抱て手月の接貴乃
うへ出し身を賜らぐかに紙のをあるんや我和性ふちれ妹妹ゆ。
〜こて事をくゆんとぷたゐとまふ其家を出門下のふ雪ら家
に紙て成婿ずんゆに来ろうとつ白妙ぐ成衣のまく髪も梳せぬ
をうそふ雪入に起ていうあやいうふこいつふ白妙我刀自の如ぐ成動
紙せてうつやとう梳洗かるしべふ雪小袖を取出し白妙にあて二人

をひくう爲め其夜い其所に宿せしむ。妙子て回合人に見とるこ実て里にある後の諸妓無数て者く利栄翅をで敷ひ義ひ名義をとに醉をとて免ぬ。ごを風流れ領袖洗良に其人を始まりこ寿きを。小雪こ二人ひをきて遊廓のムは実るやいるを小雪らこ。老父近日いうたく今又妓を要る帰あく実べかんらの中ぶいをうなさん。是ゆ尚万金の計をはるどが雪こ。ぶるい夫妓豊後絵に徳ぶきこ。今倉空に其顔をれ〜ぶ〜。古ぶ遊きぶに浸居〜て。後一人先ぶりてをこ〜きを又求めぶ若のひ〜とはて後ぶごを遊〜ムで事あ〜ん。白ぶ実て我はようへて出るれよとんでやとうけなう。扨〜もてんく〜あべ室のオに実を伺とうて〜あ〜のちんぶ〜めくとる後ふ和ぬまべ後者揮れるをるんと強にぶ方ぶ諸とる和に妓る。明月雪牛其ぶの妓女に皆和ぶて実をとゆ水に隔んて別をるんぶ雪ぶ〜一つの提灯を贈て去う。二人は



にゆう玉へども安身の期定がたし。長途のほまぐを慰る。画軸。競香。習て弄種を是此里衆娣妹の嬉乃起此中に収めかく示なり。白粉足を更て謝辞経んでろに一生へ。此示の君達へ見ても人を情させ水に流させるなくひとすぢ身はわさそうる田舎にゆけば又あるべきと身を期しがたく。これをいかざうのおまもなりん。いづれの君も身のこてろなくぶらせ給へざうるうぞたのりげある世をおあ玉へてと。心添てそつまりなりまず。われ如る出船とも。そ深くところ出て去も葛家も浮まとめの定めるき身ぞかとこれなし。かくて二人は大抵にうそり築紫の便船をと求め。而くよ風を候て船中の九日余もなけまべ於が戯に一枝をと画てを上に賛の詞さへ男とうへ画

鮮印帰来欲臥家　東籬無菊首堪爬
丁寧莫索塵中種　恐是路傍媚客花

安方ろろに墨がれの霜寒寄みて白き菜くいこん。保自ら嫌して
語西菊と及ひず我見を法んとそ

私の上のとりまとりの人のひとろる華は露なく妙の白き菊
妙吟しと華の露いふ孤しくやとぐさ人即刻ちれろと紅日紅雅
て周防の室殘とろう私をとり此地とと古里の便宜なれと風家あ
ふと寓居を聴とて箱崎の親しき方とひとりとにけ物て親の乳母
とろかひ空も晴ろる日と往迎きと遊行し。雨の日ひとりあそ酒の
ころるやどにすこしい我家のこちたけ。ぎに人あり江口の西なる
柴は浦に柴江酒部輔原縄と由緒ある浪人何の生業とも此室
積と我日客寓しろる。人家の内ろ白妙ら男に法と非同ろうをと
てえろ蒼嫖の因ありて里とある所に路の折ろと折ぐ。ちひと今人
と具せられ田舎とろ。とそ俄となろ。くを之なく跡とと

とあさるに其所はざるべくもあれに柴江ろ。とて白妙とたろ子
の上をも空はろ。くを相タと俄にけて其所ろりろと白妙ら寓ろ
ろ。ろ人とあれ。柴江見を呼ぶ。ぎとあろと我ろろ
人家といざるひあるまなるまなの人の見下のあふいろる人ぞ彼者をふ
人ら迫に侍るたあ。べ用ひのあるしなろ。彼ら若き人あはてろ人とと
へ行ぐも。ぴ深海賊のかろ祇とむ。ぎきと我し公の命とと。ひそれは
ふとあり。て海俄をさぐろ捕ろんがあなろ。ぴ若に人其ふ。て住むす
ぴあやちら祇ふん矣止ろ。ひなろとにきぐ。くいぐ。ぴ男ぴ貴の
因舎人とと改を叩て呼び。貌志を賜ま必ぬ。ぴ謝。なん。彼ろ。ぎも
のは豊ふ。て郷領ら一ふいぴ。石具せろ賣女ぎに決絶ろ。さは教督
をも連続さ。せなんと國なる親ハ一生狂面せるくと。教志せろ。ぶ人
ま當津と参看し。問答教日と及ぶ。臨し。細に生ぬ。ぬ人。ぬ納せろ

ともへても浮浪なし何とのかはへて女を棄却させ独身にて縹緲いさ
しぞ又れ不具を調へねさせたきと溝を落し底を傾て諸が柴江復之
に熟じかめて親族をもふて深切なるをりる。女の容ならはおのまゝ身に
質て計れ。我門にぶの内も妻を挂せるものお往ゆくかりよれよすがさ
どゆらん。我にはかねてさりりなくだ露こゝろときまよるなばいとる酒返
なればニ人に深く誓みたへと。ぱ柴江が旅店をもかくろて別まねばいへれ和
多のみ竜とそ安方が母をとれ一族なり。柴江が親しくかろう女れ授け
不便くゑかり実へりれ一つの力とゆそ秘も柴江に向るり。一段ふをうと
舐旅亭みいざるび身りぷふもしそはも事を持ど玉いどんべ。維済の
家も血脈に不孝流身一人に帰るへし。ざる大人平生厳重なる人
にそ党方の教にて整員す躾るとしさんも愛を絶つき不なければ。
今女をさしと不く漂流と実なるど打斬ても捨べくきさん。一腐親友
多とスども。当時家勢盛なれバ一人として為大人の意を逆へざる
ものなし。誰か賢兄の為に祖をせんだく人詞を出とも。為又れい
かりそえてハ却て其人も賢兄をそしるまで遠くはなりてさあれば家業
を他門のもにゆづりて。賢兄一生はほに投去来をかくてつかもそひる
き旅宿のたくもあひ長久の計にあり。貯を空なし種はもれてかりて
進退へられせんなぶ小志気所時年中の抽大半費し。なを人つくどと忍ばねう
なればきへを踏むて悔わりなるかなりぶ多りずにのぶ。そもし婦人は水性九くも角
もなり況や娼家の女ぞ去情も一時なり。假之も一時なり。彼高名なる妓女
桐壽の人。天下に鉄なく。或ハ西國に稼なる男ありて賢兄を假にちかひ契夢
きなる縁人にはの地歩とやるもかならずや。今まかゐむき婦人を人に托へ
によろ世賢兄ごろ家にかりうしろめたく時代結果軽薄の子を世人に爰
後侑を賣弄して心の閑をゆるがせ。言を語り承るに信うし標を撓く

折んとし墻をこえ隙を抜て忍び事を仕出さんと思ひたまれて家をも親を離れ浮浪不義の人は天地の間に立ぬる犯そ。親をこひさびて居るに回せれと涙を尽し説給へ元よりとる紙かるる小たち。程の面紙に伏し〳〵自失てひざ紙に也只我不義なるのみ捨きれ出さう今見を免まえ計いたまふ。ふかく訪かし。妻を他に通しも猶身にして陽らまかぐ。れのまそる文の思をもとるべあ。妻せ〜ち力軽しおびひ。女の身まよひ計ひ。んぶを帝ひ切る顔色にて女と見まそ眺と〜と共の方に向なり探び紙に離て事かとるべ。少〜く其端を開きて彼が有さ様をとんべと海山のこひを胸にたくて見るのみも定に寓にかりめ

古今寄談槃野話第五巻上終